

現代經濟學入門

〔增補改訂版〕

有斐閣雙書

現代経済学入門

〔増補改訂版〕

大石 泰彦 編



有斐閣双書

＊入門・基礎知識編＊

〈執筆者および執筆分担〉

大石泰彦	(東京大学教授)	I
宮沢健一	(一橋大学教授)	II
福岡正夫	(廣応義塾大学教授)	III
荒憲治郎	(一橋大学教授)	IV
嘉治元郎	(東京大学教授)	V
宇野健吾	(筑波大学教授)	VI
伊達邦春	(早稲田大学教授)	VII
島野卓爾	(学習院大学教授)	VIII



有斐閣双書

現代経済学入門〔増補改訂版〕 ¥ 1,000.

昭和39年3月30日 初版第1刷発行
 昭和48年2月28日 増補改訂版第1刷発行
 昭和55年2月29日 増補改訂版第12刷発行

編者 大石泰彦

発行者 江草忠允

東京都千代田区神田神保町2〜17

発行所 株式会社 有斐閣

電話 東京 (264) 1311 (大代表)
 郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 希
 本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前
 京都支店 [606] 左京区田中門前町44

印刷 大日本法令印刷・製本 高陽堂製本

© 1973, 大石泰彦. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替いたします。

1333-097124-8611

は し が き

Well begun is half done. 物ごととはなにによらず、はじめが大切である。ピアノの練習などでも、はじめ妙なくせをつけてしまうと、上達はおぼつかない。この事情は経済学の学習についても、全く同じである。経済学は決して難かしい学問ではない。それは言うならば、常識に毛が生えた程度のしろものであるにすぎない。しかしそれにもかかわらず、ただしく経済学をマスターしていると言えるひとは案外すくない。いやそれどころか、経済学はむずかしいという、いくぶんは非難の口吻も交えての嘆声さえ跡をたたない。いたい、これはどうしたことかということになると、それは詮ずるところ、よい手引きが存在しないためであるということに帰着するのである。

本書はなによりもまず、経済学への正しい、そして（正しいがゆえに）容易な手引きの書として書かれた。経済学の勉強の出発にあたって、本書を一読することが、さきざきの勉強をより容易にして、より正しいものたらしめること、これが本書の意図である。したがって、新制高校の経済の学習——余談にわたるが、現在のそれには教科書の内容をはじめとして、きわめて多くの問題がある——を終えて、あらたに大学において経済学を学ぼうとしているひとびと、

2 はしがき

あるいは、むかし一度は経済学を勉強したが、その後急速に発展した新しい経済学の傾向に正しく沿って、その再学習をしようと考えているひとびとは、本書をひもとくことによって、必ず大きなプラスが得られるものと確信する。経済学においてもっとも大切なのは、経済を見、これを分析するにあたっての基本的視角と、基本的分析用具——それは数においてほんの一にぎりすぎない——を駆使しうる能力とを確保することであり、さらにつけ加えるならば、経済学全体に対して、均斉のとれた展望をもつことである。小冊子ながら本書は、こうした点の達成に十全の配慮をしたつもりである。このため材料の取捨選択、説明の詳略などについても、必ずしも在来入門書と称するものの例にならわなかった。ここで一々その理由を明らかにする余裕は、とうていこれを見出しえないが、このような編別構成のもとに、このようなテーマのとりあげかたをしたのには、それなりの確たる理由があつてのことと理解していただきたい。

なおひとこと、『現代経済学入門』という書名にふれておきたい。この書名は本書が出版元の『現代 学入門』というシリーズの一冊として、刊行されるためのものであるが、われわれ執筆者はこれを、「経済学一般に対するこんにちの立場からもっとも適当と思われる形での入門」という意味に理解して、本書をつくりあげた。いわゆる近代経済学に対して、その成果をさらに押し進める仕事は、20世紀50年代から新しい用具を使って精力的になされつつあることは、本文のなかにもふれてあるが(21頁)、こうした最近10年余のうごきを、伝統的な近代経済学と対比させる必要のあるとき、これを現代経済学とよぶのがわれわれ経済学者のあいだのならわしとな

っている。本書にあって、この最近の経済理論の発展に対する直接の入門が、意図されているのではない。むしろ、こうした最近の経済理論のうごきを正しく把握するためにも、当然知っておかねばならぬもっとも根底的な事項の体系的な論述というのが、本書の意図された性格なのである。それは書名からあるいは速断されるかも知れぬように、「いわゆる現代経済学（という特定のジャンル）に対する入門」ではないのである。

さてこのような意図のもとに書かれた本書は、読者諸君にどのように受け取られ、どのようにその経済学のマスターに——われわれ執筆者一同が心からのぞんでいるように——役立つことであろうか。不測のあやまり、ないし不適切・不十分な説明もあるいはあるかも知れない。とくにこうした入門書については、読者諸君の忌憚のない批判あるいは感想が、将来の改善のよすがとしても、ぜひのぞましい。われわれはこの点における読者諸君の協力を心から期待している。

最後に、昨年企画がなされて以来今日に至るまで、有斐閣編集部
の沢部英一、平川幸雄のおふたりには、なにかとひとかたならぬ御
厄介をおかけしたことであった。執筆者一同を代表して心からお礼
申し上げる次第である。

1964年3月9日

東大経済学部研究室において

大石泰彦

増補改訂にさいして

1964年3月刊行以来8年有余の歳月の間に本書旧版が受けた圧倒的な好評にむくいるためにも、改めて稿を練り直す時機に立ち至っているのではないかという考えが、共著者たちの間に熟してきたのは昨年春もたけたころであった。「経済学への正しい、そして（正しいがゆえに）容易な手引きの書」として「経済学の勉強の出発にあたって、本書を一読することが、さきざきの勉強をより容易にして、より正しいものたらしめること」という本書旧版の精神をそのまま踏襲して、各著者が改稿のしごとになずさわった成果がこの増補改訂版である。僅少の手直しにとどまった章もあれば、完全な新稿というべきほどに書き改められた章もある。さらに新たに「国際経済」にかんする有力な一章が書き加えられた。この改稿および新章の付加によって本書のできばえがさらに一段と向上したことは、共著者一同の確信するところである。しかしこれと同時に、本書をさらにさらによりよいものにするためには、読者諸賢からの忌憚のない批評ないし注文が不可欠の要件であることも依然として真である。この点で、われわれ共著者は読者諸賢の倍旧の御協力を期待していることを最後に申し述べておきたい。

1973年1月28日

共著者一同を代表して

大石泰彦 識

目 次

I	総 論——近代経済学とは何か	1
1	経済学への出発	1
2	近代経済学の基本性格	6
3	近代経済学の系譜	13
4	経済学の学問区分と構造	23
5	近代経済学の学び方	30
II	経済循環の総過程	35
1	生産と消費の経済秩序	35
2	経済活動の循環図式	42
3	国民所得の循環過程	49
4	経済循環と経済構造	61
	〈参 考 文 献〉	70
III	経済主体の行動	73
1	家計の行動	73
A	消費需要量の決定	73
B	消費財の需要曲線	80

6 目 次

C	用役の供給曲線	87
2	企業の行動	89
A	生産要素の結合	89
B	生産量の決定	93
C	生産物の供給曲線	97
D	生産要素の需要曲線	99
	〈参 考 文 献〉	102
IV	市場価格の決定	103
1	競争と市場形態	103
2	費用曲線と収穫法則	108
3	収入曲線と企業利潤	115
4	産業における価格形成	125
	〈参 考 文 献〉	133
V	国民所得の決定	135
1	国民経済の巨視的モデル	135
2	消 費	140
3	投 資	145
4	投資・貯蓄の所得決定理論	150
	〈参 考 文 献〉	157

Ⅵ 貨幣・金融および財政	159
1 貨 幣	160
2 金融・財政政策	174
〈参 考 文 献〉	180
Ⅶ 経 済 変 動	183
1 乗数理論と加速度原理の結合	183
2 ポスト・ケインジアンの循環的成長理論	199
3 新古典派成長理論の誕生	209
〈参 考 文 献〉	218
Ⅷ 国 際 経 済	219
1 国際分業と貿易利益	219
2 国際収支の構造と均衡	225
3 国際収支の調整	229
4 現代世界経済の動向	240
〈参 考 文 献〉	248
索 引	249

I 総 論——近代経済学とは何か

1 経済学への出発

経済問題の重要性

実存的存在としてのわれわれの現実の生活は、きわめて多種多様の要因の統一体として成立している。そこには宗教的・倫理的な面もあれば、政治的な面・法律的な面もあり、また美的・芸術的な面も存在している。しかし、なかでも物質的・経済的な面すなわち経済生活の面がそのきわめて重要な一面であることは何人も否定しえないところであろう。「人はパンのみにて生きるものにあらず」(旧約聖書申命記，新約聖書馬太伝，路加伝)。経済生活，物質的生活をわれわれは唯一無二のものと考えてはならない。人間の評価を，その獲得する所得の多寡の尺度をもってするのは愚の極みであるし，蓄財をこの世における最上の目的と考え，その追求に汲々として日夜明け暮れているともがらは憐れむべきかな，である。しかしわれわれ人間にとって，われわれの生活のうち経済生活の面をないがしろにすることは許されず，それどころかそれがきわめて重要なものであることを明確に認識しておかねばならない。ケンブリッジ学派の創始者であり，いわゆる近代経済学の樹立に最も力のあった1人である アルフレッド・マーシャル (Alfred Marshall) は，古典的名著『経済学原理』(1890年，第8版1920年)の冒頭の叙述において，「世界史を形成してきた二つの大きな力は，宗教の

力と経済の力とであった」という意味のことを述べているが、この言葉は決して単なる誇張ではないのである。

しかもまたわれわれの周囲には、依然として多くの貧困が存在し、また景気・不景気の交替的な変動すなわち景気循環も、かつての激烈なスケールこそ減じたものの、なお跡を絶たない。また働く意志と能力とを持ちながら、職につきえない人も決して少なくない。しかもわれわれが特に心すべきは、これらの貧困や失業は、われら人間の物質的生活水準を低下させるにとどまらず、ひいては道徳的水準の低下の原因ともなることである。いにしへの東洋の賢者は「衣食足って礼節を知る」といった（管子、牧民篇「倉廩実則知礼節、衣食足則知榮辱」）。われわれの周囲にはいまだなお、改善すべき多くの経済問題が存在しており、それらの改善が人間生活一般に対して持つ意義にはきわめて大なるものがある。われわれはここに経済学を学ぶ意義を見出すのである。われわれが相携えて、より良い生活水準を享受し、よって人間生活一般の向上をはかるためには、まずわれわれの経済生活における諸原則、われわれの経済生活がその上において営まれている経済組織の要点、などについて確固たる認識を持ち、その上に立って相ともに経済生活の向上を目指す組織的なたゆまぬ努力を続けねばならないのである。

経済学の実践性

このようにして経済学はすぐれて現実改善の意欲と結びついた学問である。ピグー (A. C. Pigou) が的確に述べたように、科学的探究には、光明をもたらす面すなわち認識のための認識という面と、果実をもたらす面すなわちなにかよいものを達成せんがための知識という面との二面があり、諸々の学問にはこの二面が種々の程度でまざり合っているのであるが、経済学はたとえ即時的ではないにせよ、いつかその研究が社会の改善に資するという意欲のも

とに研究さるべき学問分野なのである。数学の学徒であったマーシャルを経済学へと向かわしめたものはロンドン貧民街の散策であった。おなじく数学の新進学徒であった ウィクセル (K. Wicksell) をして偉大な経済学者たらしめる機縁となったものも、たまたま彼が行なった貧困と人口との関係についての弁論の受けた批判が、貧困の原因にかんするより立ち入った省察を彼に強いたためであったといわれる。これらは経済学の本質が、現実の改善のための学問という点にあることを明確に指摘することにおいて、単なる挿話以上の意味をもっているといわねばならない。カーライル (T. Carlyle) は驚異は哲学の初めであるといった。しかしピグーもいう通り経済学の初めは驚異にあらずして、むしろ陋巷の汚辱と凋萎した生活の陰惨とに憤りを発する社会的熱情なのである。

このような経済学の実践的性格は、経済学の生誕以来の歴史に徴しても明らかである。遠く 重商主義 は国の富の本質と、その増大の方策とにかんする (体系を欠如した) 思索であった。重農主義 は旧体制に対する自然的秩序の確立のさけびであった。スミス (A. Smith)、マルサス (R. Malthus)、リカード ★ (D. Ricardo) の古典学派、あるいは リスト (F. List) に始まるドイツ歴史学派等を見ても、経済学が事実においてそれぞれの経済政策論の裏打ちとしての経済理論であったことはきわめて明瞭に看取される。以上われわれは冒頭において経済学の根底に存する実践的政策論の本質、現実改善のための学問という性格の確認をなしたのである。

冷静な頭脳と温い心情 しかし問題はじつはそう簡単なものではない。
われわれをして経済学への沈潜を決意せしめ

る上述のような実践的動機は、文字通り正当なものとしてたしかに高く評価さるべきものである。しかしわれわれがここで改めて特に強調し、注意を喚起せねばならぬのは、このような実践的動機と、経済理論を追

求し、その体系を樹立しようと努める過程そのものが実践的意図によって左右されることとは厳に区別さるべきであるということである。われわれは、あくまで現実の世界の改善のために経済学を学ぶ。しかしひとたびその探究の過程に入るにおいては、そうした問題意識、より正確には実践的志向との断絶をあえてし、もっぱら客観的な理論の世界に沈潜せねばならない。正しい行為に先立って、観照のひとときをわれわれは真剣にすごさねばならない。実践的意図の強さのあまりに客観的論理を歪曲したり、不完全な推論のままに実践にとび移るときは、真の学問的態度ではないと知るべきである。経済学の研究に志す人々は、その第一歩において、起動力としての実践的意図を衷にひめて純粹理論のけわしい世界にわが身を投ずる覚悟がなくてはならない。社会改善の熱情のみからは社会改善のよい解答は生まれてこない。これを得んがためにわれわれは、どうしてもひとたびはそうした対現実的な熱情と意識的に断絶して、あくまで冷静に学問的探究を行なう必要があるのである。1885年ケンブリッジ大学の教授の地位についたマーシャルは、その開講の辞において「冷静な頭脳と温い心情とをもって自己の周囲の社会的苦悩とたたかう」人を要望したが、この要請こそは、今もかわらぬ経済学徒の具備すべき要件といわねばなるまい。温い心情に支えられぬ理性だけでは、現実の世界において結実しない空疎な理論に終わらざるを得ぬであろうし、冷静な理性を欠如する改革の熱情は、推論を浅薄皮相なものたらしめ、その安易にしてセンチメンタルな結論を、なんの見境もなく実践にうつすとき、社会が蒙るのは進歩の恩恵ではなく、かえって混乱と、予期に反した退歩とであろう。病害の徹底的駆逐は、基礎医学の進歩をまって始めて可能である。われわれはつねに明確な実践的熱情をうちにひめつつ、冷静な学問的探究に身を投ぜねばならぬ。しかし、ピグ

—もいう通り、「経済学者がやりとげようと努力している 複雑な分析は単なる体操ではない。それは人間生活改良の道具である。われわれを取り巻く悲惨と汚穢、一部富裕家族の有害な贅沢、多数の貧困家族を蔽う恐るべき不安。——これらのものは無視するにはあまりにも明白な害毒である。われわれの学問が追求する知識によってこれを制御することは可能である。暗黒から光明を！ この光明を探し求めることこそは、“経済学というディズマル・サイエンス”（陰気な学問）がこの学問の訓練に直面するひとびとに提供する課題であり、この光明を発見することこそおそらくはその褒賞なのである。」

2 近代経済学の基本性格

近代経済学——マルクス
経済学との対比における

さてわれわれが以下において展開しようとしている経済学の体系(システム)は、ひとくちに近代経済学といいならわされているそれである。それは、多かれ少なかれいわゆるマルクス経済学との対立関係において把握された、こんにちにおけるオーソドックスな経済学の体系にはかならない。われわれがこういうとき、そこには体系としてのマルクス経済学に対するひとつの評価が存在することは読者諸君も容易にこれを認められるであろう。われわれは以下においても、マルクス経済理論のうちより採るべきものはもちろん積極的にこれを採ることに躊躇しなかったのであるが、しかし、たとえば『資本論』の所説をそのまま容認したり、現代におけるインフレーションを金と紙との価値の乖離^{かいり}と説くごとき(一部の)マルクス経済学者にはわれわれは同じえないとする立場に立つ。繰り返しているが、以下に展開される経済学の体系は、こんにちにおいて最も正統的とわれわれの信ずるところのもののエッセンスであるが、その背後には、今日なおわが国の一部において根強い影響力を有するマルクス経済学に対する相対的な低評価が存在するのである。

実証科学として
の近代経済学

かかるものとして把握されたいいわゆる近代経済学について、われわれはいかなる特徴を指摘することができるであろうか。まず第1に、それが事実の説明にかかわる 実証科学(positive science)であることがしばしば指摘される。つまり、「存在するもの」(Sein, as it is)としての経済的世界、ならびにその上で生起するもろもろの経済現象はいかなるものであり、またいかにしてそのようにあ

り、またそのように動いているのか、この解明こそが経済学の少なくとも当面の目標なのであって、経済学は「当為」(Sollen, as it ought to be)にかかわる規範科学(normative science)ではないのである。一例をあげていえば、われわれはまず、賃金が1日2,000円でも1,500円でもなく、まさに1,800円と決まるのはどうしてか、を解明するのであって、1日1,800円の賃金水準の善悪をあげつらうのではないのである。

このような意味での、現実の経済現象の分析と説明とにかかわる**実証分析**(positive analysis)、**実証経済学**(positive economics)こそがまず近代経済学の意図するところである。この所説にはなんびとも異論はないはずである。さきの価格水準の決定の問題ばかりではない。どのようにして国民所得はこれこれの大きさになるのか、いかにして失業は生ずるのか、また景気循環はいかなる原因から生ずるのか等々は、たとえ、他の事情にして等しいかぎり、国民所得は大なるほどよく、失業は少ないほどよく、景気循環は小さいほど、あるいは少なくともある程度以上には激烈でないほうが良いとするのが、ほとんど自明の価値判断であるにしても、それら善悪の問題とは論理的に別個な、しかもきわめて重要な問題であろう。科学は叙述し、分析するのであって、善悪を説くものではない。この科学における中立性は、そのまま近代経済学の基本性格を構成する。近代科学、特にその中心的位置を占める物理学から、近代経済学は多くの概念と方法とを学んだが(たとえば均衡、その安定性、静学と動学、等々)、なかんずくこの中立主義、実証主義こそはそれから承継した最も大きな特徴であったといえることができるであろう。われわれが効用を云々するとき、それに効用を認めるひとの存在するかぎり、たとえ道徳的には十分に排せらるべきであっても、阿片も売春も他の消費者財(および用役)一般とひとしなみにこれを扱うのは、その単なる一例にすぎない。そうし